# 教育パンフレット

## 支那の古蹟

購入
15.5.1
帝國圖書館

五月十日號

財團法人
社會教育協會

7

始

# 教育パンフレット

第三百七十五輯

財團法人
社會教育協會

# 目次

支那の古蹟……社會教育協會編（一）
一、はしがき——二、上海——三、蘇州——四、揚州——五、南京——
六、廬山——七、武漢三鎭——八、杭州——九、寧波——一〇、紹興
新國民政府の宣言……（四〇）
編輯後記……（四四）

# 支那の古蹟

## ―揚子江流域を主として―

社會教育協會編

### はしがき

古さと廣さを世界に誇る支那の古蹟は、謂ゆる古蹟のその全部の名を誌るすだけでも容易なことではない。ましてその起原を探り、變遷を尋ね、現狀を示すといふことになつては、非常な困難を伴ふわけである。從つて短時間には調べるだけでも苦痛である。調べる材料が整つてゐればまだしもだが、思ふやうにゆかぬ所へ、一度は少なくとも見て實際に調べた上でなければ、現況

の如きは何とも云はれない。而も行つた所で、仲々ゆつくり調べて居れないし、下手すると手も足も出ない隔離された狀態に在つたりして、その大多數にしろ、はつきりさせることは出來難いことである。更にも一つ、今度の事變で一足飛びに大變革が、古蹟の上にも行はれたであらうことは明らかである。その上、その後の有樣は到底一々は知るべくもない。

このやうに見て來ると、結局書けないことになつてしまふ。然し一面から考へると、今日のやうに、一般の人々に支那の土地が、地名がはつきりと強く知られ、更に深く知らうと望まれてゐることは、今までになかつたことではないだらうか。そして、このことを更に他の立場から見れば、土地の事情なり、住民の習俗なり、延いては支那一般の國民性に就いて、我が國民の認識を深からしめることは、東亞の進展を確定的ならしめるために、最も必要なことと考へられる。

唯、地理的な説明にしろ、全體を書くことは早急には不可能であるし、又一般的に見て意味もない。從つて特に我が國民一般の記憶に殘る戰跡に重點を置き、古蹟名勝の多少を紙數と併せ考へて、蘇州、武漢三鎭、廬山、南京、揚州、上海、杭州、紹興、寧波の都市を選び、これに徐州赤壁、莫干山、錢塘の大潮、普陀山、九江等をそれ〴〵近い項目の所に入れて記述することにした。その記述に就いて、其の土地の性質上、佛敎の寺と道敎の觀とに偏り易い。もつとも、古蹟の半ばは寺觀に關係するのであるが、それだけでは固より足らぬ。唯、廣く調べることの許されぬため、參考の書籍としては、手許にある、常盤大定博士の「支那佛蹟踏査古賢の跡へ」、同じく「支那佛敎史蹟」、の外、新光社の「世界地理風俗大系」第三卷支那篇下、池田信雄氏の「江南の名勝史蹟」等の好著に據るところが多かつた。唯、事變後の有樣は記すに由なく、斷片の報告に因るのみである。取急ぐまゝ、取捨、繁簡、意に滿たぬものがあるが、早急に再調、補筆も望めぬため、これを送ることにする。經緯を述べて、大方の諒恕を仰ぎ、はしがきとする次第である。足らざる所は編輯部の者の責であるが、幾分でも取るべき所ありとすれば、それは早稻田大學助敎授福井康順先生、大正大學敎授吉井泰順先生の御示敎の賜物である。玆に記して謝意を表する次第である。



## 上海

兩度の事變により、特に今次の事變に於ては、其の發端の地として敵前上陸、上海陸戰隊等の

言葉と共に深い印象を國民一般に持たしめた上海は、其の地の到る處が、強く云へば一木一草も感慨なしには見られないのではなからうか。國際都市として、大貿易港として、又今事變後の新事態に於ける經濟、交通の要地として、重きをなし大をなせばなすだけ、其の印象は強められることであらう。この樣に考へてくると、數多い戰跡の都市の中に於ても、特殊な位置をもつものとして、日本のみならず、支那の人達に取つても、とりわけ忘れられない存在としての魅力をもつことになる。此の新興大東亞に於ては大きな存在となるべき上海も、歷史的に見ての古蹟、由來といふ點では、逆に全く寂しいものである。宋代熙寧(西紀一〇六八——一〇七七)の頃より、都市的型態を具備し始めたといはれるけれども、一八四三年の開港當初すら見るべきもののなかつた程の所であつて、其の優越的位置の確立を見てから、僅かに六七十年に過ぎぬ。從つて他の都市級の古跡は少ないが、拾つて見ればなくはない。

## 寺觀

城隍廟は全く道教化して、舊上海第一の盛り場となり、丁度蘇州の玄妙觀に匹敵する存在であつて、參詣は多く、正月、端午、中秋の節日は殊に雜踏する。佛租界の法藏寺は上海第一と云はれ、近代式石造の堂々たる大寺である。七八年前は、學德高き方丈



興慈法師の下に、三百人以上の僧侶が統べられ、充實を見せてゐた。宗旨は天臺宗である。

佛租界から一〇キロ、黃浦江上流、桃の名所の龍華に龍華寺がある。その開基は吳の赤烏十年(二四七)に遡ると云はれ、有名な古塔は幾多の說話を祕めてそそり立つてゐる。兵舍に用ひられてゐた宏大な建物は、宋の太平興國二年(九七七)の建立を、幾度か重修したものといふ。彼岸一箇月の開帳中には特別の賑はひを見せるのみならず、桃林の景を賞する春の行樂地としても、廣く親しまれてゐる。有名な競馬場の近くの靜安寺も、其の開創は古く、二千數百年の香をたたへる名刹である。寺前の井戸は又古來、天下第六泉として知られ、乾隆四十三年(一七七八)、巡道盛保が修築し亭を設けて、應天湧泉と名づけた由緒も今は詮なく、其の形を止むるのみである。從つて昔は海に通ずる泉と云はれ、名も海眼と呼ばれたことは偲ぶべくもない。

香火の盛んなことで有名な紅廟卽ち保安司徒廟は、上海第一繁華街、大馬路の中心をなしてゐる廟で、觀音を祀つてゐる。變つたものとしては、徐光啓に依つて創立された徐家滙の敎會がある。三千人を容るる禮拜堂、雙塔の鐘樓等の外、天文臺、孤兒院、施療院、圖書館、博物館等文化施設の完備を以て有名である。

## 名勝

西湖の三譚印月を模したと傳へられる湖心亭は、曲折する九曲橋に連なり、遊樂の士相手の茶館、骨董店で賑はつてゐる。又、設備結構で上海第一の稱ある愛儷園、雅美宏壯を誇る哈同園、花園と眺望で知られる半松園等の新時代の名園や、東園、西園の乾隆の昔を語る名園があり、外に、上海の國際色を示す外人專用の公園が澤山ある。

舊上海人に依つて滬上八景の名を以て呼ばれてゐた名勝がある。海天旭日、黃浦秋濤、龍華晚鐘、吳淞煙雨、石梁夜月（小東門外の舊方濱口に架してあつた萬雲橋に石刻の雲の模樣があつたといふ）、野渡蒹葭（野渡は蘇州河上流嘉定縣下の黃渡を指す）、鳳樓遠眺（舊城壁上の丹鳳樓上より）する遠望の美）、江皐霽雪の八種であるが、半ばは名にのみ殘るものであり、他も昔に變る姿に依つて傳へられ、時の流の速かなるを嘆ぜしむるのみである。

## 蘇州

支那南北の地形の差異を簡明的確に表はす語としてよく用ひられるものに、「南船北馬」がある。その水の南支の特質を最もよく具へてゐる一つが此の蘇州である。昔から杭州と並んで天堂に對



比せられるまでに山水の美に優れてゐるのみならず、政治上の位置を南京に奪はれ、經濟的の機關を上海に取られた今も尙古都としての風格と藝術都市としての手工業品の製產と農漁產物の豐富を以て鳴る屈指の存在である。

此の地はもと姑蘇と稱せられ、戰國の昔、今から約二千二百年前、吳王闔閭に依つて始めて築城せられ、其の子の夫差又之に都したるに思を致せば、吾等に特に一種異樣の懷古の情を催さしむるものがあらう。卽ちそれは兒島高德の名と共に想起せられる「天勾踐を空しうする莫れ、時に范蠡無きにしもあらず」の文を引くまでもなく、「臥薪嘗膽」の語と共に銘記せられる吳王夫差と越王勾踐の爭覇の地であるからである。越との戰に負傷して遂に死せる父闔閭の無念を晴らすべく、夫差は賢臣伍子胥と共に越に復讐せんとして、薪に臥するの辛苦を以て自らを鞭うつと共に、夫差汝は越人の汝の父を殺したるを忘れたるかの言を以て他をして面詰せしめる方法を併せ用ひて自策自勵に餘念なかつた。然し目出度く越に勝ちての後に、伍子胥の越王を殺すべしとするの提言を退け、太宰伯嚭の助命を可とするに從つたばかりに、勾踐をして膽を嘗めて會稽の恥を忘れざらんことをつとむるの餘日を保たしめ、身を滅すの端を作つた。戰勝の美酒に醉ふ夫差

が、愛妾西施に溺れ、姑蘇臺の遊興に政を放擲するを諫めて伍子胥は革の袋に入れられ長江の沛に捨てられ、「吾目を抉りて東門に懸けよ、以て越兵の吳を滅ぼすを觀ん」との恨を殘して死せる後、遂に夫差は連敗の身の立場を逆にして、姑蘇臺に上つて越に和睦を請ふて聽かれず、「吾以て子胥に見ゆるなし」と悔恨に身を責めつゝ、帽を以て顏をかくして死せる哀史に端を發してゐるだけに、悠々たる長江の流に對比して一層の旅愁をそゝるよすがとならう。

その後、秦の始皇の時會稽郡を置かれ、漢代には股くぐりを以て聞ゆる賢臣韓信の治下に配せられ、隋の開皇九年に蘇州の名に改められた。一省の政治、經濟の中心として大都會であつたが前述の如く段々に其の位置を剝がれ、併せて長髮賊の亂に燒かれて、古の面目の半は失はれたものの、今は復興を見て、相當の賑はひを見せてゐる。尤も蘇州の面目は舊蹟としてのそれよりは氣候の溫和、人情の純美、或は謂ゆる蘇州美人の產地等の諸點と、姑蘇三千六百橋、吳門三百九十橋の句の示す水都としての美景とに在ると云はれるのに從へば、遊子の心を滿して餘りあるものがあらう。

名勝には、蘇州七名塔の一に數へられる瑞光寺塔(吳の赤烏十年、孫權の建立)、規模の雄大なること江南第一と云はれる孔子廟(宋の范仲菴の創建にして、清朝の再興)。及び古園滄浪亭、怡園、江南最大の建築物の稱ある報恩寺の大塔(北寺塔とも呼ばれ、高さ約八十米、九層樓、孫權の建立、塔上からの眺望の絕佳で有名)、雙塔寺塔、支那道觀中比類なき本尊と結構とを持つ玄妙觀、拙政園、城外の運河と澹臺湖とを繫ぐ千二百呎の穹窿石橋の寶帶橋等がある。更に日本人に取つて逸すべからざる名勝寒山寺がある。梁の武帝の天監年間に遡るとは云ふものの、今の堂宇は新しくして小さく、俗惡な色彩が施され、見るべきものはない。從つて文徵明筆の舊碑及び兪樾の新碑に示される張繼の楓橋夜泊の詩

月落烏啼霜滿天　江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺　夜半鐘聲到客船

の情趣を慕ふ吾等を滿足せしめるに足らぬ。然し日本人に依つて憧憬されること此の寺の如く强く一般的なものは少ない意味に於て往訪一見の價値はあらう。その外、閶閭の墓、雲巖寺を以て聞ゆる虎邱、太湖遠望の大觀を以て知られる靈巖山(靈巖寺の古塔あり)と天平山(紅葉の名所白雲寺あり)、及び陽山(夫差終焉の地)、姑蘇山(夫差が西施の爲に造營せる姑蘇臺の故址)等がある。

# 揚州

支那の二大工事の一として、萬里の長城と共に世に知られる大運河に沿ひ、風光の佳麗と舊跡の豐富並に美人の產出とを以て天下に響く勝地が揚州であり、支那人をして住まば揚州と云はしむる惠まれた所である。遡つて禹貢に於ける揚州の域に至るは問はないとしても、古く吳越に代るゞ領せられ、漢代景帝の時、廣陵を改めて江都と呼ばれ、隋の煬帝によつて揚州の名を與へられ、江都宮を置かれた由來を持つてゐる。元初には江淮行省を設け、マルコ・ポーロも此の地に在住したと云はれる。對岸の瓜州が鄭成功活躍の地として、又わが和寇が暴れた所として我々に興味を持たれると同樣に、此の揚州の地もわが國に律宗を傳へた鑑眞和尙(六八八——七六三)並に和尙と共に日本に來て、後世、日本天臺の上に大きな影響を與へた白塔寺法進の在住の點から、又入宋し母を殘して彼の地に逝つた三井寺の成尋和尙(一〇一一——一〇八一)所緣の意味からも、又和寇經略の點から見ても我々の心を强くひくに足るものがある。現在の舊城卽ち內城に對して新城である外城は和寇に備へて造られたものである。十支里の城壁は當時の進出活躍の如



何に激烈であつたかを示すものであらう。

## 寺觀

大寺として第一に數へられるのは天寧寺である。唐の則天證聖元年の創建に因つて證聖寺と呼ばれ、後、正勝寺、興敎院の名を經て、宋代に天寧萬壽寺と改められ、三百年の昔、淸初康熙帝は臨幸すること六度といふ由緖を持つてゐるが、今は大なる伽藍も荒れて僧徒も取立てゝ云ふべき者もゐない狀態である。唯、黃色の瓦と門內の御碑亭に康熙帝の詩を刻してあるのが目につく位のものである。成尋和尙の參拜せられたといふ壽寧寺は、いま尼寺で、廣照禪林といふ陋さくるしい寺と變つてしまつてゐる。城隍廟の傍に立派な石塔のある石塔寺といふのがある。此の塔は從來、誰も紹介してゐないと思はれるにも拘はらず、塔全體の均整の美しさ、四面に彫つてある佛體の素晴らしさから見て、かの樓霞寺の白塔に次ぐ立派なもので、長江流域での名塔と考へられる。高さ約二丈餘の七重塔で、火災に遭つた形迹はあるが、花崗岩らしく、時代も宋を下らざるものと推定される。

鑑眞和尙の第一の緣故地龍興寺や開元寺は、いろ〳〵と似通つた寺、例へば隆慶寺や高昊寺を訪ねても、結局不明に終つたとの研究者の報告もある。崇福寺や延光寺も勿論探すに由なき狀態

である。大明寺卽ち平山堂のある今の法淨寺は、古の棲靈寺の故址としての關係もある所であるが、鑑眞和尙が大明寺に在つて律を講じてゐた時に、わが國の僧榮叡と普照が來たつて其の渡日を懇請して容れられた點で記念さるべきである。常盤大定博士に依つて其の記念碑が建立せられたことは誠に深い意義を持つものとして喜ばれたが、前の事變後には地中に埋沒せられたと云ふ今事變に於て果して全き姿を見せてゐるかどうか。蓮性寺はもと法海寺と稱せられたものを、康熙帝が行幸して今の名に改めた。喇嘛塔は順治年間に、趙子柳江なるものが、兵戰後に散亂せる故骨を收藏する目的で建てたものを、轉輪藏と名づけて蓮性寺に屬せしめたものである。

觀音山寺は宋の摘星寺の後であるが、淸鐘の梵字を刻せるものの外、見るべきものもない。其の他、今は殆んど見る影もない梅花嶺の前には明末の忠臣史可法の墓があり、外に、漢の大儒董仲舒の舊宅の址と云はれるものに董公祠がある。

## 平山堂

隋の煬帝（六〇五——六一六）が江都に幸し、水調九曲を作つて池上に奏せしに因ると傳へられる九曲池の前面に連なる丘陵卽ち蜀岡の法淨寺の境內に在る。「淮東第一觀」と稱せられる眺望の優秀なるは、其の平山の名が江南の諸山檻前に平列するに出づることからも察せられるだらう。而もこれは宋の慶曆八年（一〇四八）に歐陽修が楊州の守と爲つた時大明寺庭の坤隅に堂宇を造營し、四方の名士と交遊したことに始まることが一段の風致を感じさせ、淸朝の康熙帝は行して詩文勅額を贈り離宮を其の傍に營んだ。更に丘陵には歐陽修に始まるといふ松が次々に補植されて松籟がに加はり、柳、芍藥、班竹、梧桐等も殘り少ないながら、往時文人淸遊の名殘りを止めてゐることは、われ等の趣味に合することと一段と深いものがあらう。

又、近くには蘇東坡の建立になり、其の名稱も東坡の詩から取られた谷林堂がある。平山堂の下方には「天下第五泉」と呼ばれる泉がある。唐の陸羽が茶をここに煮て、この水を天下の第五品と爲せるに因るといはれ、乾隆帝も之に幸して第五泉の詩を賦したといふ由來を持つてゐる。

## 運河

運河の舟遊は楊州の面目を知るために缺くべからざるものである。固より前述の寺觀の一半竝びに平山堂その他の蜀岡の古蹟も之に依つて探り得られるものである點からも、これは重要であるが、杜牧之の

青山隱隱水迢迢　秋盡ニ江南ニ花未レ凋
二十四橋明月夜　玉人何處教レ吹レ簫

或は杜甫の「桃花細逐楊花落」の風情を知り、兩岸の老柳に楊帝植柳の始を偲び、橋上の樓閣に煬帝麗人を携へての悠遊を思ひ、近くは乾隆南巡の折、美人をして錦繡の纜を結びて御舟を引かしめたりといふ豪遊の跡を問ふ意味から、更に重要な意味を持つてゐる。柳、槐、桑が水に影を落し、石橋、寺塔の隱見して旅情を慰むる中に、湖心律寺と稱する小堂や、蓮花橋の上に五亭を作つた五亭橋の近代の建築ながら、乾隆帝遊樂の故事と景觀の秀逸で知られてゐるもの、或は清末の豪族徐寶山の故園である徐家花園等が點在して、倦むを知らざるものがあらう。

## 淮安・淮陰・徐州

運河のことを述べたついでに、揚州とは離れてゐるが、我々に親しみを持たれる地を二三取れば、運河に沿うて上記の所が目につく。淮陰は小都市ながら交通の要地として、又商工業地としても相應の繁盛を見せてゐるが、我々には漢の韓信の生地と傳へられ、その址と稱するものがある點で、又淮安にはその韓信の名を覆ふ有名な逸話、股くぐりの跡といふ股下橋のあることで一應心ひかれる。

徐州は今事變中での大規模な會戰として記憶される徐州包圍戰の中心地である。春秋時代の宋の彭城であつて、後、西楚の王項羽の都した所、漢の張子房が轂を碎いた所と傳へられる子房山



或は唐代に張天翼が隱栖した雲龍山、仙人がその有する二鶴を放ちて樂しめるに因るといふ放鶴亭、又は宋の蘇東坡が自ら造營して客と遊んだといふ黃樓等の名勝が、其の他の軍事、政事貿易上の重要さの上に出て遊子に親しまれる。又近くには漢の高祖出身の地、豐、沛の縣、張良が兵法の師黃石公に會つたといふ邳、項羽の出た宿遷等があつて、我々の記憶を呼び起してくれる。

## 南京

南京の名は、支那事變に依つて我等日本人の全般の頭に最も强く印象付けられた地名であり、其の陷落に對する關心も一入深いものであるが、それは蔣介石政權の首都としての存在に基づいてゐる。然し單に現時に於ける政治的要地としてのみならず、永き支那の歷史の流れの中に於ても、其の存在は大きな意味を持つてゐたのであり、從つて幅の廣い興亡變轉の背景を有してゐる爲に、現時の山河木石の生々しい記憶の上に更に一段の奥深い影が感ぜられる所に、大都南京の魅力があると云へよう。

古く遡れば二千三百有餘年の昔、春秋の吳の地であるが、戰國時代楚の金陵邑の名に示さば金

陵が此の地の古名である。秦の始皇帝の時秣陵と變り、三國時代には吳の孫權の都となつて建業と改められ、東晉の武帝に到つては洛陽に代る首都建康として記錄され、更に陳に到る間の歷代南朝の帝都とされ、又唐には江寧と改められ、宋の武帝の都せる後、幾多の變轉を續けつゝ、明には太祖の都城應天府として裝を新にし、成祖（一四〇三——一四二四）の燕京に都するに及んで燕京の北京に對して南京を以て呼ばるゝに至り、今日の名となつた。其の後、長髮賊の十餘年に亙る占據、第一第二の革命の兵火等に荒されたのが、開港場として近代的姿に改裝されつゝあつた進度を更に一段と早めたのが蔣介石の首府としての選定であつた。我々の耳に南京政府の名は今尙ほ新たな響を持つて居り、「南京陷ちぬ」の歌詞も忘れられぬ感銘を呼び起させるものがある

## 城壁

ニュース映畫に見る城壁の偉容は皇軍の苦鬪を示して餘りあるものがあつた。さすがは北京と並んで支那に誇るだけあつて、周圍三十餘キロ、高さ十三メートル、から二十五メートルに及び、幅は七メートルから十三メートルの巨大なるもの、十數個の門を具へてゐるが、特に光華門の名が强く我々の胸を打つ。是の城壁は明の太祖が洪武年間（一三六八——一三九八）に、七年を費して築造したもので、近時防備を嚴にされ、皇軍の進攻を沮んで暫



時の苦戰を味はせたことは、忘れられない。

## 中山陵

近代支那建設の祖として忘るべからざる存在であり、一般民衆の尊崇の的として偉大なる心的中樞をなす孫文の墓が卽ち中山陵である。南京の東郊の紫金山上、數百段の石階と樓門を下に見る圓頂のドームは誠に壯麗であり、其の下より中山門に至り市中を西し北して西北方下關に貫通してゐる幅八メートルの中山路は古都南京に近代の息を通はせる路であらう。今時の事變にも破損を受けなかつたといふが、新生支那に於て如何なる意義と聯關を持つことであらうか。

## 故宮と孝陵

明の太祖の宮城の址が故宮であるが、長髮賊の亂に燒かれて、今は五龍橋の中に八角堂があり、堂內の血蹟亭に烈士方孝孺の血痕を止むる碑石四を藏してゐるのみで、外には、遺跡保存館に些少の遺物を殘してゐる。

中山門外四キロの北、鐘の麓に、明の太祖に馬皇后を合葬した孝陵がある。陵城は實に廣大ではあるが、樓殿は皆廢滅に歸し、前方に金陵を控える景觀の美と、沿道に點在する高さ四五メートルの花崗岩に依つて作られた獅子、駱駝、象、麒麟、馬、人等の像が豪勢の昔を表はすだけで

ある。鐘山の北麓には太祖の功臣李文忠の墓がある。元を滅した此等の人の世も亦變り、次の清朝も亦革められて、移りゆく世の儚さが事變後は一入深く感ぜられることであらう。

## 秦淮

これは城内を東西に曲り流れる運河の名。二千二百有餘年前、秦始皇帝巡遊の折此の地に王氣ありと云はれて、これを洩らさんために開鑿せりといはれる。桃葉渡、利涛橋の名所もさることながら、妓樓軒を連ねて水に影を寫す所、畫舫を浮べて美妓と佳酒に世の憂さを忘るゝ遊客の踵を接する所として、水都南京の一情緒を代表する存在である。近作「新水滸傳」の主人公我馬造も著者村松梢風氏に依つて之に遊ばせられてゐる。

又此の河畔には、凡そ對蹠的な感を與へる夫子廟の壯麗な名建築と、明の永樂年間の文官試驗場で、二萬六百室を有し其の數の受驗者を收容したといはれる貢院の一部とが殘つてゐる。

其の他、南方第一の宏大を誇る道教の朝天宮があるが、七八年前は、外觀のみ古へを偲ばせるものがあるのみで、軍機廠か何かの寄宿舍と變つて入ることも出來ず、三清殿前と思はれる廣場は若い人達の運動場となり、「德配天地」「道貫古今」の欞星門の文字が滑稽な感を以て眺められただけであつたと云はれてゐる。「國民革命軍陣亡將士公墓」と變へられた梁の寶誌、智藏の住した



靈谷寺、斗母宮、天台大師、鑑眞和尚に緣由ある瓦官寺、梁の武帝に緣の古い古鷄鳴寺、法眼文益の居た掃葉の清凉寺今は延壽禪寺と名を改めた寺觀、等何れも多く荒廢しつゝありしもの竝に雞籠山上の北極閣、聚寶山上の雨花臺等よりする眺望、蓮の莫愁湖、島の玄武湖等數ふべき勝境が多い。ともあれ、新支那中央政府の首都としての南京の復興は驚くべき速度を以て進められつつある我等は其の隆盛を祝して、移ることなき確固たる地位の一日の早く築かれんことを祈るや切なるものがある。

## 廬山

佛教史蹟として、景勝の地として名を稱へられる廬山は九江の南約十七キロの地に在つて、揚子江と鄱陽湖との間に連つてゐる。其の九江は、「潯陽江頭、夜客を送る。楓葉荻花、秋瑟瑟」の句に依つて始まる唐代の詩人白樂天の「琵琶行」ゆかりの潯陽の地である。此の九江の地は景勝の地としてよりも、水陸の要衝として、今次事變に於いて印象を深からしめた。廬山は九江通過の船上より遠望することが出來るが、鄱陽湖上よりの仰望は更に優れたものとして稱せられ、「廬

山高々たり翠萬里、懸泉千尺飛龍を挂く」の形容も單なる美辭ではない。更に山中到る處、兄弟たり難き秀峯に惠まれ、史蹟寺觀に滿たされてゐる。從つて蘇軾が「題二東林壁一」の詩に「橫看成レ嶺側成レ峯。遠近高低各不レ同。不レ識二廬山眞面目一。只緣二身在二此山中一。」と云つた如く、其の眞面目何處に在るかを知らざることになる。

歷史的には、匡廬の傳說はともかくとして、「歸去來辭」に因つて知られる晉の陶淵明が彭澤の令を辭して、山中の黃龍山の北、栗里虎爪崖に入つて特に名を知られ、唐の詩人李白が五老峯の下に書堂を構えて作つた「日は香爐に照つて紫煙生ず。遙かに看る瀑布の長川を挂くるを。飛流直下す三千尺。疑ふらくは是れ銀河の九天より落つるかと」の詩或は「流を挂くる三百丈。壑を噴く數十里」等の詩は更に山名を高め、白樂天の「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聽き、香爐峯の雪は簾を撥げて看る」の詩は、日本の才媛淸少納言の才智を知らしむる物語をも生んで一段と名を弘めた。又、李渤が後屛山下に設けた白鹿洞書院は非常な反響を呼んで數千の子弟の學ぶ所となり、廬山國學の名天下を覆ふと云はれた。更にこれは宋一代の大儒朱子の復興に依つて、後に名を殘すに至つた。



從つて全山數ふるに勝へざる多くの名勝に依つて滿されてゐるが、特に香爐峯、双劍峯、蓮花峯、大林峯、天池峯、五老峯、紫霄峯、鐵船峯等の諸峯が知られ、黃龍廟、女兒戲、天池塔、雲中寺、南康嶺、三豐泉、蓮水祠、獅子岩、白鹿洞書院等が重なる名勝として擧げられる。山中三百の寺も今は荒廢に傾き、外人の避暑地として白堊の家、旅館、劇場の文化的設備の大規模を以てする方面に名を成さしめてゐる觀がある。筆者は蔣介石の共匪討伐の當時、妨げられて廬山の前面を見たのみであるが、粘嶺の天池寺、「世界佛學苑淨土林」のある大林寺は何れも石造とコンクリート造りで僧徒は五、六人のみの寂しい狀態であり、仙人洞は俗惡極まるもので道士四、五人、香爐峯の下、廬山第一寺とある西林寺も大雄寶殿は荒れるに任せ、千佛塔も周圍のみの哀れな有樣であつた。唯、ここに慧恩の法兄慧永の墓のあることを發見し得たことは何にも優る收獲であつた。東林寺の門近くに唐の永淳二年(六八三)云々の六角經幢と、客殿の壁のほとりに半ば頽れたものながら、開元十九年(七三一)の東林寺碑があることは注意せられねばならぬ。日本畫の好畫題として取られる「虎溪三笑」で有名な此の寺の門前の橋は今は見るかげもなく、人に云はれねばわからぬ狀態になつてゐる。大殿の中の明代の銅塔は今なほ現存してゐる。蔣介石が數

千金を投じて、此の寺の修繕を助けたといふことも、今は物語として興味があらう。今度の事變に從軍の將士中の專門の人達に依つて廬山攻略の陣中で、廬山の史蹟探索の研究が續けられてゐることを新聞は報じてゐた。親しく見聞された收獲が、文獻上の記述と對比されて開示される日を待ち望んでゐるものは吾等丈ではあるまい。知己の二三をその中に持つ者として、特に又曾遊の地としての懷しみを有する者として、一日も早く報告を聞きたいものである。

## 武漢三鎭

此の名は、南京に次いで今事變に大きな時期を劃するものとして銘記される所である。然し事變に於いて持つた位置を古蹟名勝の上にそのまゝ有することは困難であらうと思はれる點は寂しい。中でも最大の都市漢口がさうであるが、古都武昌はさすがに誇るべきものがある。

### 武昌

隋、唐、宋の各時代の鄂州、江夏の地として、元、明には湖廣省の省城、又清には湖北省の首府として重要な所であつたのみならず、宣統三年の革命の大業を完遂させた據點として、更に今事變下には南京の後の首都としての漢口に附接する都として知られた。最も著明なるものに黃鶴樓がある。古くから我が文人にも親しまれた名である。これは城内を東西に横ぎる蛇山の西端が盡きんとする江頭の丘上に昔の跡を殘してゐる。幾度か災害に損はれたのを、乾隆に到つて整備された二重建は長髪賊に、更に再建のものも又燒かれて、樓上に呂祖殿はあるものの偲ぶよすがもない俗惡な赤煉瓦の測候所として存在するのみで、昔人白雲に乘つて去つた後に、空しく殘されたといふ傳說も、飛鶩舞鶴に似ると稱せられる美觀を持つたと云ふことも今は幻影に委す外ないが、千載空しく悠々たる白雲の下、孤帆遠影碧空に盡くる長江の大觀を恣にすることの出來る樓上の眺めは昔に變らず、その意味で人をして愁へしむるものがある。名に憧れて訪るる人の多きため、茶館が軒を連ねて、遊樂地として賑はひを見せてゐる。

武漢大學への中途には寺があり、長春觀や北支那には全く見うけない名前である古天符宮、武當宮、五聖廟等がある。寶通寺の塔は宋代のものと思はれる七層八角の雄大なもので、頂上からの俯觀は一寸比類がない位美しい。今次の兵火にも無事に免れ得て、往訪する者を樂しましめてゐることは、文化史的意義は外にしても嬉しいことである。マルコ・ポーロに關係づけられて傳へられる此の寺の接引殿、大雄寶殿ともに清楚で山門も長く、僧侶も百人といひ寺として整つた

美しさを持つてゐる。長春觀は全眞教卽ち北京の白雲觀と同派のもの、道士百餘人、山門は小さく、境内は狹いが、實に堂々たる建物を持つてゐる。傍の藏經閣は立派な外觀のみで、道藏は國民軍革命の砲火に燒かれてしまつた。其の他、張之洞の別莊であつた蛇山の抱氷堂、楚王臺、粤略樓、梳粧臺等がある。

## 漢口

古代禹王の治水に依つて開かれたと傳ふるものの忘れられて、十八世紀末より歐米人の手で急激なる發展を遂げさせられただけあつて、古蹟は少く、問題になる寺觀もない。革命に大半を燒かれて後、特に近代都市として甦生し、揚子江、漢口の水利に依る貿易、工業の要地として將來に重きをなす所に其の特色を見るべきである。市中到る所に川あり橋ありの水都としての美觀は遊子を樂しませるものがあらう。

## 漢陽

市街の中央に聳ゆる大別山は、禹王の長江開通に依つて、武昌の蛇山との連がりを斷ぜられたと傳へられる。山上に禹王廟がある。一に魯山と稱するのは、吳の魯肅の廟があつたのに因る。東方中部に雅趣ある二層樓の晴川閣があつて、景觀に惠まれ、黃鶴樓と對比せられる。「晴川歷々たり漢陽の樹、芳草萋々たり鸚鵡の州」と詠ぜられる鸚鵡州は其の



下に在つて、時の流れを感ぜしめるものがある。

寺には武漢第一を誇る有名な歸元寺がある。三百餘人の僧侶を有し、見事な統制の下に曹洞禪寺としての面目を示してゐたが、事變前の住職であつた三十歳の龍昆和尙の消息は不明ながら、寺内一丈三尺餘の五百羅漢と共に健在を祈ること切なるものがある。又同じく名を知られてゐる玄妙觀は規模の大を門構へにも知ることの出來るものであつたが、事變前は兵營に轉用せられてゐて一歩も入ることが許されなかつた。事變後如何なる姿で存在してゐることか、知り度いことである。その外、昔馬までも其の妙音に醉へりと傳へられる伯牙が琴を鼓したといふ伯牙台は、今、古琴台と呼ばれて月湖の中の小島に在る。古雅な建物に對する蓮池の眺めが特に優れてゐて、凉地として懷しまれてゐることは、彈琴の故地だけに一段と趣深く感ぜられる。

## 赤壁

三鎭の近くの名勝として特に知られるものに、武昌の南、漢口を溯つた所、嘉魚の近くに赤壁がある。三國志に依つて知られてゐる千七百年の昔、吳の勇將周瑜が魏の舟軍を擊滅した古戰場で、江の邊りに迫れる斷崖の一角に赤壁の二大字が刻み込まれて居り、船上の旅人をして船足の速きを嘆ぜしめるであらう。同じく赤壁に黃州の赤壁がある。前者

が武に關するものであるのに對して、これは文の赤壁で約九百年前蘇東坡の「赤壁賦」に因つて更に一段と汎く親しまれてゐる。「壬戌之秋、七月既望、蘇子與客。泛ヽ船、遊ニ於赤壁之下。」の句で始まつてゐる名文の持つ魅力は日本の文人一般にも殊に憧憬の思を深からしめた。「お茶の水」の地を「小赤壁」と稱したり、「壬戌之秋」の觀月を殊の外に事寄せて賞美したりすること等に見ても、其の一端を知ることが出來るであらう。今、其の地に殘る樓閣の古めかしきを、眼前にすることが出來たならば、地下の文人諸氏にも羨まれる幸福と云ふべきである。

## 杭州

「日軍百萬上陸」のアドヴアルーン揭揚といふ變つた思ひ付で殊の外親しみのある痛快味を思ふ存分味ははせられ、印象の深さに於て今事變中で屈指の一に數へられる杭州灣敵前上陸の地の奥に在るのが杭州である。古來、蘇州と併び稱せられ、上の天堂に對比せられる地上第一の勝地として、日本にも普く知られてゐる。マルコ・ポーロが世界に冠たるものと推賞したといふこともさることながら、之に遊ぶ者盡くが、支那人自らの世界に冠たりとする自慢のあながち虛辭ならざるを悟るべき、幾多名勝としての條件を具備してゐる。其の條件とは北と西と南とを初陽臺、葛嶺、南高峯、棋盤山、吳山等の低山に圍まれ、中に長堤、小島を持ち、數ふるに遑のない寺觀古跡、名勝のそれ自體に特殊の價値を持つものが又山水の美を引立る點景物として到る處に在つて、自然と人工の美事な調和を示してゐる西湖の存在がそれである。此の意味からすれば西湖あつての杭州といふべきである。殊に唐末五代の戰火にも燒かれず、宋代佛敎の發源地となつた丈に、寺觀の多いことは定說のある所で、顧亭林が九國に倍すといひ、夢粱錄卷一五に「釋老の敎天下に偏ねし、而して杭郡を甚だしと爲す」と云つてあるのでも知られる。又此の地は今事變に於ての意味だけでなく、和寇の活躍地として、且つ幾多の入唐、入宋の僧の往訪地として、我等に深い關係を持つてゐる點からも、注意さるべきものである。



### 西湖十景

杭州の西に連なり、周圍十四キロの中に孤山、三潭印月、湖心亭の島を有する西湖の風景は、古來十景、三十六名蹟、七十二勝等の名を以て數へられてゐる固より文人愛玩の餘に出づるものであるが、一般に知られてゐる十景をあげれば、大體は窺ひ知られる。蘇東坡が築造したといふ湖面を南北に切る長堤の楊柳が中間の六橋と相和して一名を六

橋の煙柳といふ「蘇堤春曉」、西方の南北二高峯の併立をいふ「雙峯挿雲」、碧浪空に搖ると見られる柳糸を前景とする「柳浪聞鶯」、宋の内侍廬允升の元廬園の金魚、鯉魚に遡る「花港觀魚」、蘇堤の北、岳湖に至る所に在つたといふ址のみを殘す「曲院風荷」、康熙三十八年、孤山の下、三湖の水を繞らし全湖の勝を集むる所として建てた一亭を中心とする「平湖秋月」、淨慈寺前の「南屏晚鐘」、外湖南部の一島の近くに蘇東坡の建立の後、萬石年間再建の三個の石塔の月に映ずる影を取つて「三潭印月」、南屏山に在る吳越王錢氏の妃の建立にして、七級より五級に改められ、其の古雅の形と赤色の磚とで知られたのが、自然崩壞して舊形を止めない雷峯塔に因る「雷峯夕照」、白沙堤の第一橋である斷橋畔「斷橋殘雪」がそれである。其の名の示す景物必ずしも完からざるものがあるが、昔日の名を偲ぶのみならず、今日尙その風趣の捨て難きを嘆ぜしむるもの多きは云ふまでもない。

## 寺觀

南山律の會正派の本山昭慶寺は淨行社結成の時は王文正公社主となつて一千數百の僧俗が相會したといはれ、國民政府の手で再築された戒壇を持つ堂々の伽藍であり、寺僧も今尙二百を數へる。雷峯塔崩壞の後、西湖の風光を代表してゐる觀のある保淑塔は



寶石山に在る九級のもの、吳越王の臣延爽が東陽の善導和尙の舍利を奉じて創建したのを、宋初に僧永保が重修せるに因る名で、現今僧坊の寶塔院は滅び去つて塔のみあるが、これは近年の修繕で改惡された傾がある。智圓の寺、瑪瑙寺は形ばかりで昔の名を偲ぶよすがもなく、葛玄練丹の故趾葛嶺は單なる廟にすぎず、宋の林和靖が梅を植え鶴を放つたといふ放鶴亭のある孤山の智圓の住寺廣化寺も僧の姿もなく、高麗義天の住んだ高麗も道士に汚され、成尋の泊つた興敎寺即ち今の小有天園は一木一石も無い曠野と化し、荒れるに任せられてある上に、上天竺寺も近年、立派な陰壁を殘したまゝ廣壯な規模は烏有に歸して寂しさを感ぜしめるが、西湖四大寺の隨一たる靈隱寺は、傳法正宗記の著者契嵩の寺として、明代のものとしては優秀なものとされる三丈餘の六重塔、洞門、天王殿、大雄寶殿、階前二個の三丈餘の凡ならざる石塔等を存して居り、墓もある眞觀に依つて名を高め、遼式も住した下天竺寺も、兩經幢を前にする天王殿、大雄寶殿等淸朝重修の姿を止め、明代重建の中天竺寺も宋初のものと思はれる梵鐘を持つ白衣觀音堂の外、堂宇整備して居り、趙宋の代表的大作「宗鏡錄」百卷を選した延壽の住した淨慈寺も延壽の墓、宗鏡臺、正殿前の元代の石造香爐等見るべきものを廣大なる寺域の中に含めて莊嚴の風を存して居

る。天竺寺は、毎年春の彼岸詣での善男善女は數十萬に達し、支那屈指の盛況を呈する信仰の靈場として、有名である。之に附隨して西湖畔を死後安住の地として求むるの風強く、湖畔至る所に墓所、墓道が見られるのも一つの特色である。更に近頃四十の若さで死んだ支那僧で、日本人を母に持ち、外遊もし新聞雜誌界に活躍した天才兒曼殊大師の墓が林和靖の墓近く、西湖屈指の好位置に在ることは記憶さるべきであらう。

其の他、約七百年前宋の忠臣岳飛の秦檜の爲に計られて誣死し、九曲叢祠に埋められたりしを孝宗に依つて、雪寃改葬せられた岳王廟や、唐代錢塘の名妓として稱へられた蘇小小の墓、東坡を祀る蘇文忠公祠、張烈文公の墓、可憐薄命の生涯を終つた馮小靑の墓等が數へられる。規模壯大なる城隍廟、又は萬壽宮、煙霞洞、三茅壽寧觀等も一應擧ぐべきものであらう。

## 古蹟

寺觀の項に提示した蘇堤、孤山、斷橋、放鶴亭等の外に、四庫全書を藏した文瀾閣、大儒俞樾讀書の家俞樓、湧金門、宋代顯應觀の址に立つ柳浪聞鶯亭、錢王祠、敷文書院、五百羅漢其の他の諸佛像を刻する石屋洞、杭州の聖水として淸朝康熙帝も一勺を汲みたりといふ虎跑泉、白沙堤對岸に在る亭子灣を前にした湖濱公園の湖濱蘆舍菴、山間淸流の



美を以て名ある九溪十八澗等がある。

## 錢塘の大潮

杭州、上海に近く、浙江の名勝として見るべきものに、錢塘の大潮がある。舟山列島方面より上騰し來る潮水が、江内に狹められて一條の水壁を作りつつ、大音響を轟かせて津浪の如く押寄する壯觀は、確かに一見の價値を持つてゐる。其の最なるものは勿論、舊曆八月十六日の大潮にあるが、毎日の上潮時にも其の一端は窺ひ知ることが出來る。今次事變の將兵が其の壯觀を賞してゐる寫眞が新聞紙上にあつたことを記憶してゐる。遠く桐蘆嚴州までも溯るが、海寧の大觀亭に樓上するのと、閘口附近の江岸に突出せる丘陵角上に在る六和塔よりするのが最適の觀望を持つといはれてゐる。六和塔は吳越王延壽の創建に成り、幾度か重建されて今日に至つたもの、周圍約六十メートル、直徑二十メートルの十三層塔で、遙かに大海まで指呼の間に望み得る景觀の雄大な點だけでも一訪の價はあらう。

## 莫干山

杭州の北、水の西湖と共に廣く知られてゐるものに、山の莫干山がある。現今、外人避暑の地として廬山の牯嶺に次ぐ聲價を持つてゐるだけに、施設と環境に惠まれてゐるが、其の名も古代名劍工として名を殘す莫邪、干將に取つてゐる如く。刀劍鍛練の址

と傳へられる練劍池があり、傳說の古さも加はつて、味はひを深めてゐる

## 寧波

紹興に近く、之と共に都城の大に於て杭州に次ぐといはれるのがこの寧波である。唐初は鄞州の地で、後明州餘姚郡、宋の明州慶元府、元の慶元路、明の明州府を經て寧波となつたのであるが、古くより一大貿易港として屈指の存在であり、殊に日本の遣唐使、僧侶、學生等の發着地點として重要な所であつた

### 寺觀

宋代天台宗の巨星で、孤山の智圓などの到底追隨を許さぬ者として仰ぐべき四明智禮大師の住した延慶寺は平安朝の中頃、今より約千年の昔、日本の源信僧都が此の智禮大師に問題を尋ね、その持參者である寂昭が蘇州の北寺の塔の近くで死んだことを思ひ出さしめる寺であるが、天下講宗五山の第二の名に負けざるもので、大雄寶殿の三佛の高さは約五丈の立派なものであり、演法堂あり、方丈の二階は明藏を納めた藏經閣に用ひられ、僧徒も百に近く、充實の一端は一見して窺ひ知られるものがある。其の後につゞく觀宗寺は、元來延慶寺



の一部であつたと思はれるものであるが、延慶寺を凌ぐ莊大さで、これと共に攝山の棲霞寺と比肩し得べき大伽藍である。而も天王殿や其の他の諸建物の雄麗、清潔なことは支那第一とも云ふべきであり、之に相應して觀宗弘法研究學社といふ專門學校を經營し、圖書館、寄宿舍、講堂をも具備して、立派に其の機能發揮してゐることは特に注目さるべきである。このことは其の歷史にもよるが、近代支那佛教界の學者であつた諦閑が先代として住したことに因るものである。

天寧寺は唐の大中五年(八五一)の創建で、國寧寺、崇寧萬壽寺、天寧萬壽寺、報恩講寺、天寧相恩寺等の名を經て今日に至つたもの、近代の重建で、雄大な規模を有してゐる。天封寺は唐の通天登封間の建立、今は荒廢してゐるが、其の塔は百三十尺、八層の高塔で、城内第一を誇つてゐる。他に元の至治年間(一三二一——一三二三)の佑聖觀が、幾度かの改修を得て殘つてゐる。

### 寶陀禪寺

寧波に近い鎭海の北東山上に寶陀禪寺がある。これは觀音の靈地として名高い普陀山の寺院を和寇の難より防ぎ守る爲に移して觀音を祀つた所で、明の嘉靖三十九年(一五六〇)、都督盧鏜が海道副使潭綸と協力して、築いた所の高さ二丈二尺、厚さ一丈長さ二百丈の石塀の奥に、諸堂が點在し、東海を一望の下にしつゝ和寇の威武を物語つてゐる。

又、招寶山も浩渺の大海の景と嘉靖年間、普陀の殿宇を移したことで知られてゐる。

## 普陀山

支那に於ける熱烈なる民衆の信仰の對象として第一に數ふべき觀音の靈場として有名なのが普陀山である。寧波より二十四五浬の海上、周圍十里餘で、最高一千尺の山を有する舟山列島中の一島に過ぎないが、古來、文殊の淨土として五台山、普賢の淨土の峨眉山、地藏現存の地として九華山に相對し、普陀山は觀音の淨土として支那四名山の一に數へられ、一生に一度は參詣すべき聖地として今日に至るまで民衆の憧憬の的となつてゐる。

これは觀音の居所といふ補陀落山がここであるといふのに出づるのであるが、その觀音をここに結付ける發端が日本に依つて作られてゐる。五代の梁の貞明二年(九一六)に、日本の僧慧鍚が五台山で手に入れた觀音の靈像を、日本に持ち返らうとして、寧波より出帆し、此の島の近くまで來ると、船は動かなくなつた。これは龍神が物を欲するためだといふので、客の荷物を海中に投じたが、まだ動かず、これは觀音が此の地に留まるを欲するためであらうと考へて、慧鍚はその像を陸に上げた。すると直ちに船は進んで何等の異變もなかつたといふ。この說話はこの島に住む張氏がその家を寄進して觀音を祀り名も不肯去觀音とつけて、靈場の施設を具備せしめたといふ日支共力の後日譚を伴つて、その草創を彩つてゐる。



歷代皇室の尊崇も深いものがあるが、宋の神宗の元豐三年に(一〇八〇)に改築されて、寶陀觀音寺の額を賜ひ、年々僧一人を度することを許した外、普濟寺、法雨寺に對しては數ふるに勝へざる喜捨、援助が與へられてゐる。一般民衆の渴仰は、海賊の根據地としての危險、恐怖を超えて今も尙繼續せられ、夏季の參詣は特に全島人を以て滿ち溢るるの活況を示してゐる。もつとも今は信仰のみならず風光の美に勝れた海水浴の好適地として、外人始め暑さを避くる人士も多い。

寺庵の數は百數十に達し、到る處に隱顯してゐるが、前寺卽ち普濟寺と後寺の法雨寺とが特に著明である。普濟寺は宋の紹興元年、眞歇了禪師の開基の後、幾度か改修され、又和寇に襲はれては重建されて今日に至り、天王殿、大圓通殿、藏經閣、祖師殿等多數莊大なる堂宇軒を列ねてゐる。法雨寺も、明の萬曆八年、麻城の大智眞融禪師が茅を結んで後、前者に似たる徑路を通つて來たものであつて、今日樓閣殿宇の多數を擁して重きをなしてゐる。普濟寺の南には今から約六百年前、元の元統年間、孚中禪師の建立せる九丈六尺の塔が、今は五層中の三層を殘して、四面に刻んだ佛像の美を誇つて居り、寺前には海印池、永壽橋涼亭がある。

名勝としては、普陀第一の高峯白華頂が、石磴數百級の頂上からの眺望の雄大で知られ、長汀の美で鳴る千步沙、其の名で知られる錦屏山、踞獅山、雪浪山、茶山、伏龍山、象王峯、煉丹峯、二龜聽法石等や、兩大石並び立つ西天門、幽靜な南天門、潮水が遠雷の響を生ずる潮音洞、梵音石、冷水湧く仙人井、下に兩石欹つ如く、上に一石聳ゆる雲挾石、妙莊嚴路等が到る所に散在して、三日にして一應の巡覽を終るのみといふ。

## 紹興

杭州より寧波への中途、寧波運河に沿ふて、其の名に取る紹興酒の本場として知られるのが紹興である。春秋時代、越王勾踐の都にして、府城も其の臣范蠡の築造に始まると傳へられ、隋の開皇、唐の乾寧、宋の皇祐の各年代に重修せられて今日に至つてゐる。秦漢以來、會稽郡、會稽國、或は越州、吳州、鎭東郡と變遷して、紹興の名は南宋高宗の時に始まる。紹興酒の釀造販賣のみならず、穀物、織物の產地として商家軒を接する殷賑振を見せてゐる。又吳越抗爭の故地であるだけに之にゆかりの舊蹟が多く、會稽山は特に我國にも「會稽の恥」の語は今も一般に用ひ



られて知られてゐるが、春の彼岸に亡き人の魂を慰めて供物をかざり、路行く人にも供養して、佛事にいそしむ氣風の殊に顯著な淸明節の行事が今も尙盛んであることは注意さるべきである。

### 古蹟

城外に在る會稽山は越王勾踐が吳王夫差に敗れて隱れたる所であり、而も其勾踐が忠臣范蠡の力を得て雪辱し得た爲め一段と名を高くした所、越の大夫種を葬る隋の開皇十四年(五九四)詔して祠を建てしめ、唐の開元十四年(七二六)には四鎭山に封じ、淸の康熙帝は之に臨幸して興龍山の名を與へた。山上の一嶺に降仙臺、石傘峰下に范蠡養魚池、山麓に禹廟、蘭亭、南鎭廟等がある。

禹廟は禹王を葬ると傳ふる所、宏大なる二層の正殿には禹王の像を安置してある。古いだけに城內には古文を刻する窆石亭、乾隆帝參拜紀念の碑、大禹陵と刻する禹陵、窆石亭記碑、峋嶁碑亭等が散在してゐる。

蘭亭は支那の文人墨客は固より、國の人々にも普く知られ、文墨の徒の海內第一の名勝として憧憬の的とする所である。晉の王羲之が自ら其の蘭亭序に述ぶる如く、永和九年(三五三)暮春の初、群賢と相會して、一觴一詠の雅遊、曲水の宴を催した址であつて、その蘭亭の名は勾踐の蘭

を渚田に植えたるに出づといはれ、明、清、民國に幾度か重修を加へられて今日に至つてゐる。支那建築の粹を蒐めてゐると云はれる流觴亭、右軍祠、「蘭亭」亭等が墨池、康熙帝の「蘭亭」と大書せる石刻、同じく康熙帝の蘭亭序全文の大石碑等に取りまかれて、竹林の城内に立つてゐる。幾分の淋しさは感ぜられるものの、完全に保存せられてゐることは誠に嬉しいこととして、興懐其の致を一にする思で筆者も見て來た。

城外、東北に南宋の皇帝、高宗、孝宗、光宗、寧宗、理宗、度宗の六陵が南北二個所に築かれ各皇后の陵も其の間に散在してゐるが、盛大の國力を以て築いた開封の陵は金に發かれ、假に造つた粗末な此の陵も蒙古僧楊璉眞伽の爲に盜まれるの悲運に見舞はれ、僅かに貧僧唐玨の謀略に依つて盜み去られるを免れ、其の唐玨が義士として六陵に近接して祭らるるを見る時は、興亡常なき支那の哀史縮圖を見るの思がせられることであらう。

又、明の嘉清に造られ、萬曆の重修を經た二十八洞の橋脚の古雅愛すべき三江閘や、勾踐が戴を食せりといふ王家山、飛來山上の應天塔、范蠡の吳を壓せる飛翠樓の址と傳ふる臥龍山頂の望海亭、其の東北の觀風臺、觀德亭が又越王臺の址と傳へられる等、見るべきものが多い。



## 寺觀

開元寺は、日本の三井寺の開基の智證大師圓珍(八一四——八九一)が良諝座主に教を聞いた處、荊溪湛然の住趾として見るべきものである。戒珠寺は王羲之の故宅の寺となつたもので、壯大ではないが、事變前は運河に臨み三百人以上の僧徒を擁する盛んな寺、近時は學僧諦閑の書を額に掲ぐる山門に相應しく講席も開かれてゐた。華嚴寺は規模は大であるものの、僧も三十餘人で、戒珠寺に劣ること數等である。城内目拔の大街に在る大善寺は梁の天監三年(五〇四)、黄元寶の力に依つて出來たのが、重建されたもので、七重の大塔を有し、大雄寶殿の大佛も實に立派なものであり、四十餘人の僧も居り、「紹興佛教會」の額も近代味を感ぜられるものがあつたが、幾分衰退の風が傳へられてゐた。大能仁寺は古の龍興寺で、大雄寶殿には稀れに見る美事な三丈餘の釋迦三尊があるが、屋根も破れた荒れ方であつた。この龍興寺は傳教大師最澄(七六七——八二二)が支那に渡つて、泰山の靈巖寺の順曉から密台の傳授を受けた所で、日本佛教に取つては非常に深い緣故を持つものである。今は唯其の荒廢を嘆くの資となるのみであることは、誠に遺憾なことに思はれる。其の外に清凉寺や鮑府君廟、錢王祠、支那革命の志士徐錫麟を祀る徐公祠等がある。(終り)

# 和平建國に燃え
# 國交調整に邁進
## —新國民政府の宣言—

和平建國の新らしい希望に燃えて樹立された支那新國民政府の前途は、複雜怪奇な國際情勢と關聯して多難を思はしめるものがあるが、汪精衞氏以下熱血の同志の烈々たる信念と、我國が寄せる絶大な援助とは將來の大成を期待させるに十分である。

新國民政府は還都後直ちに、汪首席代理によつて左のやうな宣言を朗讀して固き決意を表明した。事變はこの宣言によつて一大轉化したといふべく、こゝにその全文を掲載して新政府の順調な成長を祈らう。

### 國民政府還都宣言文

國民政府は中央政治會議の決議により南京に還都せるを以て、玆に謹みて誠意を披瀝し明らかに全國同胞に告ぐ。和平の實現と憲政の實施との二大方針は、中央政治會議に於て鄭重に決議されたるところにして、國民政府は右方針を堅持し誓つてこれが實行を期せんとす。所謂和平の實現とは、日本と協力し善隣友好、共同防共及び經濟提携の原則に基づき、過去の紛糾を一掃し將來の親善關係を確立し、過去に於て採れる政策及び法令にして右方針に反するものあらば必ず夫々これを廢止し、又は修正し、努めて主權の獨立自由と行政の完整とを保全し、且



つ經濟上に互惠平等の合作を實行し以て共存共榮の基礎を樹立せんとするに在り。中日兩國はもと義兄弟に同じ、一旦不幸にして干戈を動かすに至れるが、今次國交の調整を經たるのちは永く和平を維持し、共に東亞を安定せしめ、同時に一切の友邦に對しても亦この和平外交の方針に基づき信義を講じ睦誼を收め以て友好關係を增進すべきなり。所謂憲政の實施に就いては、中國々民黨第五次及び第六次全國代表大會の宣言中に既に明確に規定せられ、全國賢能の士も亦夙に一致贊同するところあり。今や戰後各般の施設悉く廢絶し之が復興を待つ秋、偏に擧國同胞物心兩面の力を集中し勇往邁進し、以て現代國家の建設を完成するに賴らざるべからず。過去に於ける個人の獨裁制は、全國人民精誠團結の障害たりしを以て必ずこれを革正除去すべし。又共產黨は階級鬪爭を挑發し、特に國家民族の大敵なるを以て必ずこれを根絶廓淸しその餘毒を殘さざらしむるを要す。各級民意機關の設置、地方自治の實施及び國民大會の召集、憲法の制定發布等に至りては、何れも日を期して之を實行に現はし、以て全國人民の要望に副ふべし。以上和平の實現と憲政の實施とは、國民政府の遵奉すべき最大の方針なるとともに又國民政府の負擔すべき最大の任務なり。玆に先づ國民政府の還都に際し、我が陣歿せる將士、殉難せる人民及び和平運動のため犧牲となれる諸先烈に對し、謹んで無限の哀悼と敬禮とを捧げ、國民政府が第一に已れの責任として自覺するところは實に戰後の人民を撫恤し、その生命

財産自由をしてよく國家法律の保障を受けしめ、各々その業に安んじ以て經濟産業の復興と文化の發展に從事せしむるにあり。國民政府は謹んでその僚屬を率ゐ、廉潔勇敢、勞をいとはず怨みを受けるもなほ辭せざるを精神を以て、我が無辜の人民と苦樂を同じくし生死を共にし、以て國家民族の復興を企圖すべし。現在重慶及び各地に服務中の公務人員と一般將士に對し敬意を以て布告す。凡そ公務人員たる者この布告ありたるのち、必ず速かに南京に歸還して屆出をなすべし。右屆出ありたる人員に對しては、その確實なる表明ありたる後、總べて元給元俸を以てこれを任用すべく、その忠誠の念を抱き、その地位に應じて斡旋運動に苦心し貢獻する所ありたる者は、特に優待してこれを任用すべし。又一般將士はこの布告ありたる後、必ずや命を遵守し即時停戰し以て後命を待つべし。その正規の軍隊に非ずして各地に散在し遊擊を擔任する者も亦必ず命に從ひ活動を停止し、靜かに點檢を受け收容編成せらるを待つべし。是れ和平建國の基礎にして共に努めざる可からざる所なり。國民政府今次の還都は全國を統一し、和平の實現と憲政の實施との大道に向つて勇猛前進せんとするものにして、全國の內これを以て唯一の合法的中央政府となす。從つて重慶側に於て、若し全國內に對して法令を發布し外國に對して條約を締結するも、孰れも皆その無效なること當然なり。望むらくは重慶側も從來の行懸りを一擲し、速かに局面の收拾を圖り、共に艱難を救はんことを。事變以來、臨



時・維新兩政府等の政權前後して成立せるが、いづれも國脈を保全し、民命を維持するため、全身全力をあげ鞠躬盡瘁し、つぶさに勞苦を嘗む。今既に一致して國民政府に統一する事に同意す。依つてその辨じたる事項に對しては暫くその現狀を維持し竝びに大勢の方針に基づきて速かにこれが調整をなすべし。これより後全國は統一的指導の下に同心同德、戰後の創を癒し、將來の發展を圖るに至らん。これ實に國家民族の復興と東亞の和平との繫るところ深く囑望して已まざる所以なり。

×

これに對して帝國では直ちに政府聲明を發表して、新政府の發展に全幅の協力と支援とを與へることを確約すると共に、愈よ東亞新秩序の建設に邁進すべく、これを妨害する容共抗日の殘存勢力に對しては益々膺懲の手を强めることを中外に闡明した。この斷乎たる帝國の決意は新政府にとつて何ものにも勝るはなむけで、新政府を激勵するところ多大であつた。兩國國交調整の大任を帶びた阿部特使は既に渡支し、兩國間の重要諸懸案も處理されんとしてゐるが、兩國の聲明にあらはれた深き信賴は、必ずや急速に諸懸案を解決するものとみられてゐる。

しかし、抗日政權が存する限り膺懲の手をゆるめることは出來ない。聖戰完遂は全くこれからである。要するに新政府の樹立を迎へて事變は解決へと一歩前進したが、聖戰の目的遂行のため最後の頑張りをなし、新政府の順調な發展に全力を傾倒しなければならない。

# 編輯後記

▽支那に新國民政府が樹立されて事變は劃期的な進展をとげた。破壞より建設へと、新らしい力がもり上つて來た。

▽顧れば、日支文化の交流は千數百年の久しきに亙り、彼我の文化的融合は枚擧に遑がない。支那の古蹟の一つ一つさへもが我國の文化と密接な關係を持つてゐる。

▽東亞新秩序の建設へ第一歩を踏み出した今、これ等の古蹟を戰火の跡に尋ねてみるのも意義深いことであらう。諸先生と協力してこの一書を編した所以である。


## 本會役員

會長　法學博士男爵　阪谷芳郎
理事長　東大教授男爵　穗積重遠
常務理事　社會局長　小松謙助
理事　實業學務局長　新居善太郎
同　東京朝日主筆　關口勳
同　日清製粉社長　緒方竹虎
同　大阪毎日會長　正田貞一郎
同　前文部省局長　高石眞五郎
同　社會教育局長　武部欽一
同　普通學務局長　田中重之
同　農學博士　中野善敦
同　伯爵　那須皓
同　理學博士　二荒芳德
同　衆議院議員　藤原咲平
同　三菱社常務　牧野良三
同　女青團理事長　三好重道
同　三井報恩會　吉岡彌生
同　第一銀行頭取　米山梅吉
監事　貴族院議員　明石照男
同　岩田宙造



教育パンフレット（第三七五輯）
毎回三回（一日・十日・二十日發行）
定價一冊金十錢（送料共）
年額金三圓（送料共）

昭和十五年五月　五　日印刷
昭和十五年五月　十　日發行

東京市小石川區白山御殿町百二十七番地
財團法人社會教育協會內
編輯兼發行人　荒　木　昇
印刷人

東京市牛込區榎町七番地
印刷所　大日本印刷株式會社
榎町工場

發行所
東京市小石川區白山御殿町百二十七番地
財團法人　社會教育協會
振替東京二一三八番
電話小石川(85)二一六八番
八八五五八九番

終